

のする此舟に乗り、淺草川を乗廻し、暑をわすれ慰さむ、此舟遊の初也、翌年の頃より、大身衆も涼とて、人大勢乗故涼しからず、翌年より船次第に大きく拵へ、四五間も有舟に成、承應之頃、船の盛にて、明暦中、正月江戸中の大火事、翌年に至て、御城御普請、江戸の大名衆普請故、舟は如何様の小舟にても、材木石竹運送船と成て、中々涼の屋根舟一艘もなし、依之三四年、船遊山透とやみしに、萬治頃、右の涼舟作り出し、諸人共、夏の暑を凌ぎ、過し大火事のくるしみを忘れ、夥敷はやり、大身衆迄、あまた出らるゝにより、舟ちいさく、間敷すくなくて成らず、次第に大きく七間八間の屋形に拵へ、後は船の名川一丸、關東丸、大關丸、山一丸、熊一丸、十滿一丸、杯とて、山一丸は九間あり、熊一丸は十間有、十滿一丸は十一間有、大船に御旗本衆乗て、行厨色々美盡し、人數十人なれば、鑓十本の借て出る舟には、鑓壹筋もなし、御旗本乗たる舟は、鑓計にあらず、家來の侍、袴を著し、用人らしき者には、緋子肩衣著するも有し、近年の船遊山は、舟もちいさく、鑓杯は一筋も見へず、

〔嬉遊笑覽行七〕難波にては、屋形舟を御座といふ、明暦二年、懷子五河逍遙、河御座の涼しくもあり、今日の秋藤昌やかた船といふ名もなきにあらず、枕久物語、鷲尾に詣るところ、淀のえだ川に屋形舟をかざらせ略○下

〔塵塚談上〕屋形船の事、享保の比は、江戸中に百艘有けるよし、菊岡沾涼が編述、江戸砂子に見へたり、増補江戸砂子には見へず、最初の板にあり、寶曆七八年比は、吉野丸一番の大兵庫丸、夷丸、大福丸、川一丸など、大屋形船にして、すべて六七十艘も有けり、予顯道○小川水稽古に日々見たる所也、然るに當時は貳拾艘計も有べし、皆小屋形のみなり、たゞ家根船本名日猪猪牙船多く有家根船は、四五十年已前は五六十艘有けるよし、今は五六百艘、猪牙船は七百艘も有べしといふ、十四五ヶ年以來夥敷なれり、船宿六百軒餘も有之よし也、それ船舶は、萬民の歩運にくるしむを助ける物に